

福岡県のスギ・ヒノキ穿孔性害虫分布状況

福岡県林業試験場 大長光 純
宮原文彦

はじめに

スギ・ヒノキを加害する穿孔性害虫について、福岡県下の分布状況は必ずしも明確ではなかった。そこで穿孔性害虫のうち、スギカミキリ、スギノアカネトラカミキリ（別名キオビトラカミキリ、以下トラカミキリという）、スギザイノタマバエ（以下タマバエという）、ヒノキカワモグリガ（以下カワモグリガという）、の4種について1981年から1982年にかけて生息調査を行ない、過去の資料とあわせて分布図を作成したのでその結果を報告する。

本文に入るにあたり、現地調査に御協力いただいた福岡県飯塚農林事務所林務課高橋次夫係長を始めとする県下保認担当林業普及員の方々、文献の御教授をいただいた九州大学農学部森本桂博士に深謝する。

調査方法

2万5千分の1地図を四等分したものを1メッシュとし¹⁾、メッシュ毎に各害虫の生息の有無を調査した。メッシュ数は福岡県全体で257個となった。生息地は文献^{2, 3, 4)}によるものほか現地調査を行なった。調査にあたり虫体の確認のほかヤニや食害痕でも生息の判断の参考とした。また古い被害痕でも一応生息地とした。なおスギカミキリとトラカミキリはスギとヒノキ、タマバエとカワモグリガはスギだけについてそれぞれ調査の対象とした。調査地は代表的な山塊を重点的に行ない、すべてのメッシュについて行なつたわけではない。

福岡県でスギ・ヒノキ林は海岸部から標高1,000 m程度まで分布をしており、すべて人工林と考えられる。

結果と考察

各害虫の標高分布を図-1に、地域分布を図-2, 3に示す。次に各害虫毎に述べる。

スギカミキリはこれまでの報告⁵⁾と同様県北部の平地から低山地に広く分布していた。標高では県西部の背振山地の520 mまで食害痕が見とめられた。ただし激害林は標高約200 mまでであり、標高が高いほど被害は少なくなった。分布の変動は過去の調査⁶⁾と較べてあまり変りはないようである。

トラカミキリは今回新たな生息地は発見されなかった。図-3のうち東部の生息地はヒノキ林に発生したものであったが、現地はすでに伐採植されている。

タマバエは県南の既産地¹⁾のほか今回北西部の九千部山に新産地が発見された。そこはこれまでの生息地から約30 km離れており、自然分布か人為的分布か現在の所不明である。標高では最低300 mまで発見されたが、標高が高いほど生息密度は高くなるようである。

カワモグリガの分布状況は今まではほとんどわかっていなかった。今回の調査で海岸部を除くほぼ全域に分布していた。標高別の分布では高地から低地まで見とめられたが、無被害地は低地に多く、激害林は数は少ないがおおむね600 m以上の場所に見とめられた。

引用文献

- (1) 福岡県：環境庁委託動物分布調査報告書（哺乳類），p 2, 1978
- (2) 田川宏他：筑紫の昆虫，第3巻第1・2号，1～25, 1959

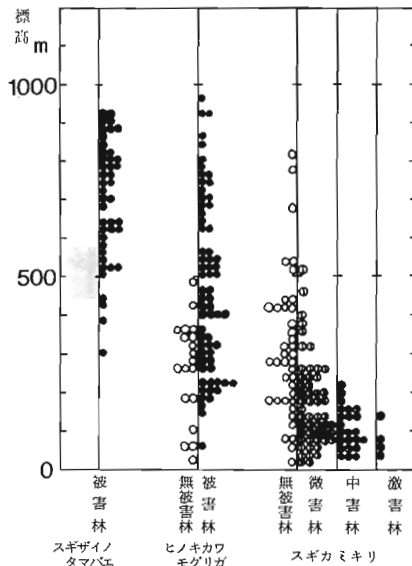


図-1 被害林と無被害林の標高分布

- (3) 佐田禎之助：大牟田の自然—大牟田自然愛好会—
p 115, 1976
- (4) 吉田成章他：日林九支研論 32, 293 ~ 294,
1979

- (5) ハチカミ共同研究班：スギカミキリによるスギの
ハチカミに関する研究, p 19, 1971
- (6) 萩原幸弘他：昭和43年度福岡県林業試験場業務成
績報告書, 76 ~ 78, 1970

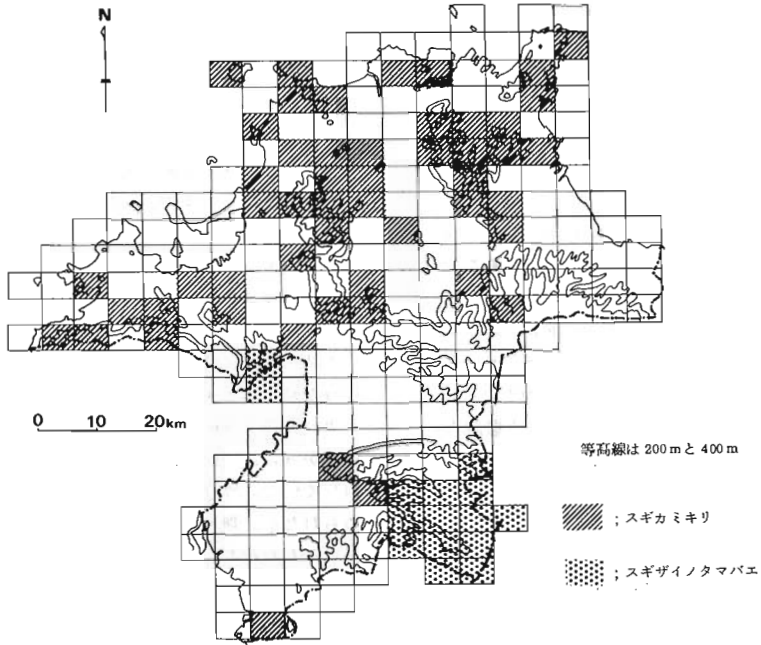


図-2 スギカミキリとスギザイノタマバエの地域分布

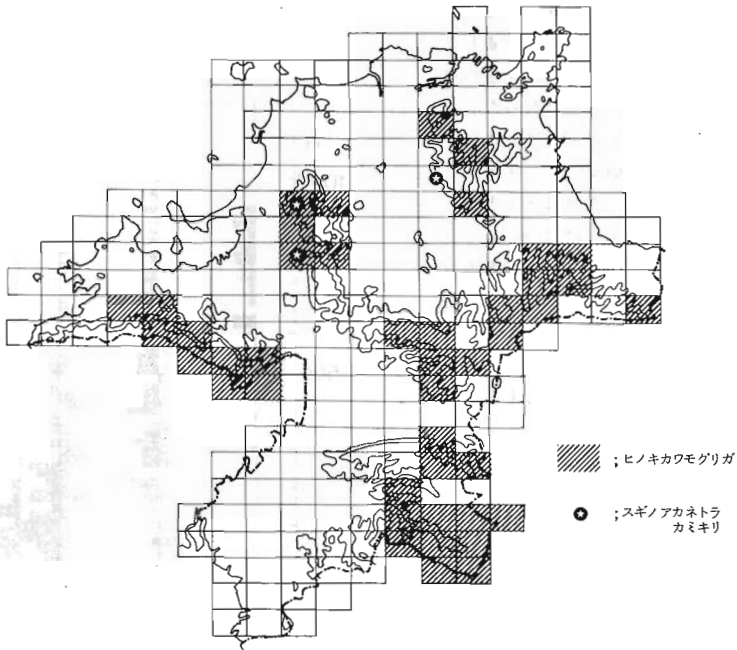


図-3 ヒノキカワモグリガとスギノアカネトラカミキリの地域分布